



—東地中海地域ニュース—

シリア：バッシャール大統領インタビューと新駐日シリア大使の宣誓式
(1月5日付アル・ワタン紙ほか現地各紙)

1. 1月5日付シリア紙「アル・ワタン」は、4日にレバノン紙「アル・アフバル」に掲載された仏国人ジャーナリストによるバッシャール大統領へのインタビュー記事（発言要旨）を報じている。
 - (1) レバノン：先般のハリリー・レバノン首相のシリア訪問は、新たなページのみならず新たな時代を示すものであると共に、正常な状態への回帰である。また、過去だけでなく未来に関するものだ。05年以前に戻ることはない。レバノンにおいて、シリアは無視することの出来ないプレーヤーであり続ける。レバノンにおけるシリアの役割を終わらせるべく組織された「3.14グループ」は敗北し分裂した。
 - (2) トルコ：03年の米国によるイラク戦争後、この侵略の炎が我々に接近していることを実感した。この試みによって、我々は自分自身を守るためトルコとの関係を発展させた。トルコとの関係は、イランとの関係よりも重要で強力なカードを我々に与えてくれた。
 - (3) 中東和平：我々は、トルコとイスラエルの間の仲介者を必要としている。この点については様々な方面からの努力があるし、仏もまた役割を果たすことの出来る国際的プレーヤーである。我々としては、先ずトルコにその役割を再開してもらい、仏にはトルコをバックアップしてもらいたいと考えている。しかし、和平構築の用意があるイスラエル側のパートナーが不在であると考えており、イスラエルとの和平交渉には懐疑的である。また、シリアは“無条件の和平交渉”を拒否している。
 - (4) イラン：（イランの核問題に関して）唯一可能な解決策は、NPTにもとづいたイランと西側の対話である。イランにはウラン濃縮の権利がある。イラン側はウラン濃縮問題にフレキシブルな対応を示しているが、西側はイランに全量を国外で濃縮するように求めている。だが、この濃縮ウランがイランに戻る保証もない。自分はサルコジ仏大統領に「私がアフマディーネジャード大統領だったら、この申し出は受けない」と言ったことがある。
シリアとイランの同盟関係は両国間の差異を否定するものではない。例えば、イランと違ってシリアには、イスラエルと平和を築き、イスラエルを承認する用意がある。イエメンの危機についても、シリアはサウジによるハウシー派への介入を支持したが、イランは

これを非難した。イランは特に 05 年以降、欧米がシリアと対立した時からシリアを強く支援してくれているが、シリアとイスラエルの和平は地域における同盟関係に影響を与えることになるだろう。

2. 新駐日シリア大使の宣誓式（1月5日付現地各紙）

1月4日、ムハンマド・ガッサーン・アルハバシュ新駐日大使がバッシャル大統領に対して宣誓を行った。同宣誓式後のアルハバシュ大使の発言：

- A. バッシャル大統領からは、全ての分野で、特に通商・経済分野で日本との関係強化や日本人ビジネスマンにシリアへの投資を働きかける必要性につき指示があった。
- B. 駐日シリア大使としての優先事項の一つは、国際協力のメカニズムおよび開発に関する日本の経験からいかに学ぶかを研究することである。また、特に通商分野における両国間の法的枠組みを補完していくことに努めたい。二重課税防止条約や投資促進協定などの諸協定の締結のためには法的枠組み作りが必要である。
- C. シリアにとって日本からの技術支援から益すること、両国のビジネスマンに共同投資プロジェクトの形成を働きかえることが重要である。